青年期における対人不安に関する研究

松　田　君　彦・樺　山　麻衣子*

（1998年10月15日　受理）

A STUDY ON SOCIAL ANXIOUSNESS IN ADOLESCENCE

Kimihiko MATSUDA・Maiko KABAYAMA

I　序　　論

対人場面で経験する不安や緊張といった主観的感情は，多くの人が昔からいろんな形で指摘しているにも拘わらず，実証的研究が始まったのは1970年代に入ってからのことである。

対人不安（social anxiety）は，「他者からの詮索や注目，あるいは単なる他者の存在によって引き起こされる動揺や混乱」（Buss，1980），「現実の，あるいは想像上の対人的場面において，他者からの評価に直面したり，もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」（Leary，1983）などと定義されているが，これまでの研究をみてみると，対人的場面における不安の感じやすさの個人特性を測定するだけでなく，対人不安を規定する要因についての研究もみられる。そしてその多くで公的自己意識との関連性が指摘されている。公的自己意識とは，自分が他者からどのように見られているかという，自己の外的側面を意識しやすい傾向のことである。ところで，菅原（1988）は公的自己意識の高さが高い対人不安傾向の条件になることは認めながらも，公的自己意識が高いからといって必ずしも対人不安傾向が高いとは限らず，公的自己意識の高い者の一部が，何らかの原因で高い対人不安傾向を示すようになるのであろうと述べ，その根拠として，公的自己意識は対人不安傾向と正の関連が認められたが，自己顕示欲求とも正の関連が認められたことをあげている（1984）。つまり，公的自己意識の高い者は，他者から見られることを強く意識するが，それが必ずしも対人不安となるわけではなく，見られることに対する積極的姿勢である自己顕示的方向性を持つ場合もある。従って，高い対人不安傾向を示すには，高い公的自己意識に加えて，他の何らかの要因が関係していると考えられるというのである。また，これを受けるような形で松尾・新井（1998）は児童を対象に，公的自己意識が高く，しかも対人的自己効力感が低い者が最も強い対人不安傾向を示すのではないかという仮説について検討を試み，明確な支持的証拠を得ている。ここで対人的自己効力感とは，「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが，どの程度自分に可能かについての主観的な評価」と定義されているが，公的自己意識が高く，対人的自己効力感が低い，つまり他者からの目が気になり，自分の社会的行動の遂行に自信の持てない子どもが，

*鹿児島県児童総合相談センター勤務（非常勤）

最も強い対人的不安傾向を示すという結果が得られたのである。このような結果はLeary（1983）が「個人の望む印象を作れるかどうかの主観的確率」の低さが対人不安のレベルと関連するという指摘とも一致する。

このように，対人不安は誰にでも起こりうるものであり，それを感じる強さに個人差はあるものの，我々が生活していく上で切り離すことのできない感情であることから，その発生メカニズムについては様々な要因が関連していると思われる。松尾・新井（1998）の研究で作成された対人的自己効力感尺度の内容は，児童を対象とした主に主張的行動や葛藤の解決行動に関するものに限定されており，その他の社会的スキルに対する主観的評価との関連も検討する必要があるだろうし，これ以外のこれまでの研究で関連が示唆されているいくつかの要因，例えば孤独感やいじめられた経験，さらには性差などとの関連も調べてみる必要があるだろう。また発達的な観点からいえば，児童期よりも青年期は自意識が高揚し対人関係で緊張が高まる時期であることから，対人不安がより顕在化し易いことも当然考えられる。

そこで，本研究では大学生を対象に，自己意識の特徴（個人内における公的自己意識と私的自己意識の関係）と孤独感を独立変数として取り上げて対人不安との関連を調べるが，まず最初に自己意識および孤独感についての研究の概略を説明し，対人不安との予想される関連性などに触れてみる。

1　自己意識について

人は誰もが外界や他者から区別された「私」，「自分自身」を意識している。特に青年期は，急激な生理的・身体的変化をきっかけとして，自己の身体，さらにはその奥に目を向けるようになり，それまでの外部に向かっていた興味・関心が自己の内側に向かうようになる。従ってこの時期は，自分の身体的特徴や容貌が気になりだすとともに，自分が他者から見られている存在であることに気づき，他者からのまなざしや評価が強く意識されるのである。

自己意識の概念は，Duval & Wicklund（1972）によって「自分自身に対して注意が向かっている状態」と定義され，これまで多くの研究を通して個人の社会的行動を理解するうえで重要な意味を持つものであることが確認されてきた。しかし，自己のどの部分に注意を向けるかによって心的な過程や行動は異なってくることから，注意を向ける側面によって自己意識を分類していく必要性が考えられるようになった。Fenigstein et. al（1975）は，この自己へ注意が向けられている状態を特性論的に捉え，容姿・容貌や外に現れる行動などといった他者からも観察可能な自己を意識する傾向である「公的自己意識（public self-conciousness）」と，動機・感情・思考・理念などのようにそれを経験している本人にしか観察できない自己を意識する傾向である「私的自己意識（private self-consciousness）」に分けて測定する自己意識尺度（self-consciosness scale）を考案し，菅原（1984）がその日本語版を作成している。

自己意識尺度を用いたこれまでの研究から，公的自己意識，私的自己意識はそれぞれ特徴的な行

動様式をもたらすことが示されている。例えば，菅原（1984）によれば，公的自己意識が高い人は他者からの評価的態度に敏感であり，他者からの目を意識して自己表出の仕方をコントロールする傾向が強いこと，さらに辻（1987）によれば，公的自己意識が高い人は他者の外面と表出への関心が高いが，一方，私的自己意識が高い人は，その時々での自分の意見，態度を自覚しているため，態度と行動との間に一貫性が高く，他者の内面への関心が高いことが見出されている。また，公的自己意識が高い人ほど社会的アイデンティティを重視し，私的自己意識が高い人ほど個人的アイデンティティを重視する（Cheek & Briggs, 1982）こと，公的自己意識は他者の視点に対する意識を高め，集団規範に同調する傾向を促進するが，私的自己意識は自己の視点に対する意識を高め，内的価値観に従わせる（Carver & Scheier, 1983）ことなども報告されている。

その他，自己意識に関する研究には，自己評価や孤独感などとの関係を明らかにしたものもあり，大学生を対象にした研究では，公的自己意識が高い者ほど自己嫌悪感が強く，男子においては私的自己意識が高い者ほど自己嫌悪感が強いのに対して，女子においては私的自己意識が高い者ほど孤独感が強い（諸井，1985）ことなどが報告されている。

このように，公的自己意識，私的自己意識に関する研究では，それぞれの自己意識が様々な対人行動に影響を与えることが示唆されているだけでなく，両自己意識の高低を人の特性と捉え，自己評価や孤独感などの自己の内面に関わる意識との関連をも示唆している。

2　孤独感について

青年期は孤独感を感じやすい時期である。Spranger（1942）が，「青年ほど，その独房から憧れの目をもって窓の外を眺めている者はいない。青年ほど，その深い孤独のうちに接触と理解を渇望している者はいない。青年ほど，遠方に立って，大声で叫んでいる者はいない」と述べて以来，青年心理学書では必ずと言っていいほど孤独感が取り扱われており，青年心理の理解は孤独感の理解抜きには不可能だと言われるくらい中心概念として位置づけられている。

孤独感の研究史を見ていくと，1960年以前は，孤独感に関する研究のほとんどすべてが患者を観察した臨床医の論説的論文であったが，1960年代以降には実証的研究も見られるようになり，社会的変化の衝撃と人間関係や孤独感との関係についての社会学的分析が盛んに行われるようになった。特に，1970年代に入り，Weiss（1973）の「孤独感：情緒的，社会的孤立の経験」が刊行されたことによって孤独感についての関心が触発されたこと，実証的研究を行う際の洞察の仕方が示されたこと，さらには孤独感における個人差を測定する単純かつ信頼性と妥当性の高い孤独感尺度が開発されたことなどが要因となって，孤独感の実証的研究が一層活発となった。

孤独感測定の研究には二つの異なるアプローチがとられてきた。一つは，孤独感は単一構造の現象であり，それが個人内で異なるのは量的側面においてのみであると考える単一次元的アプローチである。もう一つは孤独感を多面的な現象と捉え，すべての個人の孤独感に共通性を求めるよりもむしろ孤独感に様々なタイプを仮定し，表現を分類することが目的とされる多次元的アプローチで

ある。

日本においても，この二つのアプローチからなる孤独感測定法で実証的な研究がなされている。単一次元的アプローチでは，Pusell. d. & Peplau. L. A.（1980）が「孤独感は人の社会的ネットワークにおける願望レベルと達成レベルの間の食い違いから生じる強烈で不快な感情である」とする定義をもとに作成したUCLA孤独感尺度の邦訳版を工藤・西川（1983）が作成し，これを用いた研究が数多く行われている。これに対して多次元的アプローチにあたる落合（1983）の作成した孤独感尺度の質問紙（LSO: Loneliness Scale by Ochiai）は，孤独感を規定する因子として「人間同士の理解・共感についての感じ方」の因子と「人間の個別性の自覚」の因子を考え，この二つの次元の組み合わせによる四つの類型化を試みている。A型は，人間同士は理解・共感しあえると考え，かつ人間の個別性に気づいていない型である。B型は，人間同士は理解・共感しあえないと考え，かつ人間の個別性に気づいていない型である。C型は，人間同士は理解・共感しあえないと考え，かつ人間の個別性に気づいている型である。D型は，人間同士は理解・共感しあえると考え，かつ人間の個別性に気づいている型である。

孤独感の程度と他の心理的特性との関係を究明していく研究では，孤独感を感じる者の心理的特性にはかなり一貫した傾向があるとの結果を得ている。諸井（1985）によると，Rusell et al.（1980），Jones，Freemon & Goswick（1981）は，孤独感と自尊心の間に負の関係があることを見出しており，諸井（1989）や高校生から大学生を対象とした工藤・西川（1983）の研究も同様の結果を得ている。またJones et al.（1981）は，Fenigstein，Scheier & Buss（1975）によって作成された自己意識尺度と孤独感の関係を調べ，男女とも孤独感の高い者は自己を社会的対象として意識する傾向，つまり公的自己意識が高く，他者の存在によって生じる不快感，つまり社会的不安も強い。さらに女子に限れば，孤独感の高い者は自己内部の考えや感情への注意傾向，つまり私的自己意識が高いという結果を得ている。また諸井（1985）は，他者の行動を見て社会的に適切な方向へ自分の行動を統制していく傾向（セルフモニタリング傾向）と孤独感との間には負の相関があることを見出している。

Ⅱ　本研究

【目的】

Buss（1991）は，対人不安を「人前にでたときに感じる居心地の悪さや不快感である」と定義しており，またLeary（1983）は「現実の，あるいは想像上の対人場面において，他者からの評価に直面したり，もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義し，Bussと同様に対人不安を主観的経験として捉えている。Learyによると，常にそうしてるわけではないにせよ，人は他者に特定の印象を与えようと動機づけられているという。他者が自分をどのように認め，評価し，遇しているかということに関心を持っているというのである。

本研究では，対人不安に焦点を当て，自己の外的な側面や内的な側面への意識やこだわり（公的

自己意識と私的自己意識），あるいは自分と他者の関係をどう捉えるか（孤独感）などの要因が，対人不安にどのような影響を与えているかということを，青年期を対象に検討する。松尾・新井（1998）が児童を対象に調査した対人不安の具体的な内容は否定的評価懸念（例えば「友達が自分について悪口をいっていないか気になる」）情動的反応性（例えば「皆から見られると，顔が赤くならないか心配だ」），対人関与の苦痛（例えば「誰かに話しかけられるのがこわい」）であるが，これと発達的観点から比較検討が可能なように本研究でも，内容的に近い領域の対人不安を取り上げた。

【方法】

1．被検者：鹿児島大学教育学部学生，285名。

2．調査期日：1997年11月～12月。

3．調査材料と手続き

1）対人不安に関する質問紙：辻（1993）の作成した質問紙の中から対人場面に関連の深い三因子（対人的緊張因子；例えば「人前で震えたり，緊張したりする」，評価不安因子；例えば「人にいやな感じを与えていないか」，発話不安因子；例えば「うまく喋れないのではないかと不安を感じる」）を抽出し，27項目で構成。反応は5件法で求めた。

2）自己意識に関する質問紙：菅原（1984）の作成した質問紙（公的自己意識に関する11項目と私的自己意識に関する10項目）を用い，7件法で回答を求めた。

3）孤独感に関する質問紙：落合（1983）が作成した孤独感類型判別尺度（LSO）の下位尺度LSO-U，LSO-Eを独立した尺度として個別に使用し，5件法で回答を求めた。

4．結果の処理：対人不安の各三因子を従属変数，その他を独立変数として，公的自己意識・私的自己意識・LSO-U，及び，公的自己意識・私的自己意識・LSO-Eの各組み合わせで三要因の分散分析を行った。また，各尺度（質問紙）の得点化は次の通りである。

1）対人不安尺度について：三因子とも対人不安が高い者ほど高得点になるように5～1点を与えて合計点を算出。

2）自己意識尺度について：公的自己意識，私的自己意識とも，強い者ほど得点が高くなるなるように7～1点を与え，それぞれの合計点をもって公的自己意識得点，私的自己意識得点とした。またそれぞれMedianによって被検者を二群に分けH群，L群とした。

3）孤独感尺度の得点化：孤独感尺度（LSO）の各項目に「はい」2点，「どちらかというとはい」1点，「どちらともいえない」0点，「どちらかというといいえ」-1点，「いいえ」-2点（逆転項目の場合には「いいえ」に2点，「はい」に-2点）を与えて合計点を算出。LSO-U得点が1点から18点までの被検者をLSO-UのH群，-1点から-18点までの被検者をLSO-UのL群とした（LSO-Eについても同様）。

【結果】

1．対人的緊張について

1）孤独感尺度にLSO-Uを用いた場合

対人的緊張得点について，公的自己意識のH群・L群，私的自己意識のH群・L群，LSO-UのH群・L群の各条件ごとに平均及び標準偏差を求めた（Table 1参照）。

Table 1　各条件別の対人的緊張得点の平均及び標準偏差

	孤独感	公的自己意識H群		公的自己意識L群	
		私的自己意識H群	私的自己意識L群	私的自己意識H群	私的自己意識L群
対人的緊張	LSO-U H群	44.21 (10.14)	44.49 (8.97)	33.33 (10.98)	37.61 (9.51)
	LSO-U L群	50.79 (10.09)	48.67 (7.09)	23.50 (10.38)	42.42 (13.67)
	LSO-E H群	46.89 (10.05)	47.50 (7.18)	32.96 (12.27)	38.15 (10.96)
	LSO-E L群	41.92 (9.27)	42.04 (10.07)	32.60 (9.61)	38.91 (10.25)

（　）内はSD

Table 1の結果に基づいて，三要因の分散分析をおこなった（Table 2参照）。

その結果，三要因間の交互作用に有意傾向が見られた［F（1, 257）＝3.535, p＜.1］。

Table 2　対人的緊張得点における3要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	3243.493	1	3243.493	32.055＊＊＊
私的自己意識（B）	562.231	1	562.231	5.556＊
LSD-U（C）	40.606	1	40.606	.401
A＊B	772.352	1	772.352	7.633＊＊
A＊C	306.400	1	306.400	3.028＋
B＊C	184.488	1	184.488	1.823
A＊B＊C	357.674	1	357.674	3.535＋
誤差	26004.793	257	101.186	

＊p＜.05　＊＊＊p＜.001

そこでまず，公的自己意識のH群の水準における私的自己意識とLSO-Uの二要因分散分析をおこなった（Table 3参照）。

Table 3　公的自己意識のH群の水準での対人的緊張得点における2要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
私的自己意識（A）	7.461	1	7.461	.082
LSO-U（B）	263.413	1	263.413	2.804＋
A＊B	13.125	1	13.125	.140
誤差	12587.144	134	93.934	

＋p＜.1

その結果，LSO-U において主効果の有意傾向が見られ，公的自己意識の高い者では，人間同士は理解・共感できないと思っている者の方ができると思っている者よりも対人的緊張が強い。

次に，公的自己意識の L 群の水準における私的自己意識と LSO-U の二要因分散分析をおこなった（Table 4 参照）。

Table 4　公的自己意識のL群の水準での対人的緊張得点における２要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
私的自己意識（A）	1444.922	1	1444.922	13.246＊＊＊
LSD- U（B）	67.504	1	67.504	.619
A＊B	575.197	1	575.197	5.273＊
誤差	13417.649	123	109.087	
			＊p＜ .05	＊＊＊p＜ .01

その結果，二要因間の交互作用が有意であった［F（1, 123）＝5. 273, p ＜. 05］ので下位検定をおこなった結果，LSO-U の H 群の水準においては 5 %水準で，また LSO-U の L 群の水準においても同様に 1 %水準で私的自己意識の L 群が H 群より有意に強い対人的緊張を示したことから，公的自己意識の低い者では，人間同士が理解・共感できると思っているか否かに関係なく，私的自己意識の低い者の方が高い者よりも対人的緊張が強いといえる。一方，私的自己意識の要因においては H 群，L 群の両水準とも，LSO-U の H 群と L 群の間には差は見られなかった。

次に，私的自己意識の H 群における公的自己意識と LSO-U の二要因分散分析をおこなったところ（Table 5 参照），二要因間の交互作用が有意だったので［F（1, 90）＝5. 759,　p ＜. 05］，下位検定をおこなった結果，LSO-U の H 群，L 群の両水準いずれにおいても公的自己意識 H 群の方がと L 群よりも0. 1%水準で有意に強い対人的緊張を示した。

Table 5　私的自己意識のH群の水準での対人的緊張得点における２要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	3578.612	1	3578.612	32.283＊＊＊
LSD- U（B）	13.647	1	13.647	.123
A＊B	638.369	1	638.369	5.759＊
誤差	9976.512	90	110.850	
			＊p＜ .05	＊＊＊p＜ .001

また公的自己意識の H 群の水準においては LSO-U の L 群の方が H 群よりも 5 %水準で有意に強い対人的緊張を示したが，公的自己意識の L 群の水準においては両群間に差は見られなかった。このことから，私的自己意識の高い者では人間同士は理解・共感できると思っているか否かに関係なく公的自己意識の高い者の方が低い者よりも対人的緊張が強いといえる。また

公的自己意識の高い者では，人間同士はお互いに理解・共感できないと思っている者の方ができると思っている者よりも対人的緊張が強いといえる。

次に，私的自己意識のＬ群における公的自己意識とLSO-Uの二要因分散分析をおこなった（Table 6 参照）。

Table 6　私的自己意識のＬ群の水準での対人的緊張得点における２要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	751.182	1	751.182	7.760＊＊
LSO-U（B）	229.027	1	229.027	2.366
A＊B	1.073	1	1.073	.011
誤差	16165.682	167	96.800	

＊＊p＜.01

その結果，公的自己意識の主効果のみが有意であった［F（1,167）＝7.760，p＜.01］。従って，私的自己意識が低い者では公的自己意識が高い者の方が低い者よりも対人的緊張が強いといえる。

次に，LSO-UのＨ群の水準における公的自己意識と私的自己意識の二要因分散分析をおこなった（Table 7 参照）。

Table 7　LSD-UのＨ群の水準での対人的緊張得点における２要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	4301.951	1	4301.951	44.175＊＊＊
私的自己意識（B）	283.623	1	283.623	2.912＋
A＊B	2217.948	1	2217.948	2.238
誤差	22203.853	228	97.385	

＋p＜.1　　＊＊＊p＜.001

その結果，公的自己意識の主効果が0.1％水準で有意であり［F（1,228）＝44.175，p＜.001］，私的自己意識の主効果に有意傾向が見られた［F（1,228）＝2.912，p＜.1］。つまり，人間同士は理解・共感しあえると思っている者では，公的自己意識の高い者の方が低い者よりも対人的緊張が強く，私的自己意識に関しては逆に低い者の方が高い者よりも対人的緊張が強い傾向にあるという結果が得られた。

次に，LSO-U のＬ群の水準における公的自己意識と私的自己意識の二要因分散分析をおこなった（Table 8 参照）。

Table 8　LSD-U のＬ群の水準での対人的緊張得点における２要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	1523.711	1	1523.711	1.625＊＊
私的自己意識（B）	382.281	1	382.281	2.917＋
A＊B	599.518	1	599.518	4.574＊
誤差	3800.940	29	131.067	
		＋P＜.1	＊p＜.05	＊＊p＜.01

その結果，二要因間に５％水準で交互作用が見られた［F（1,29）＝4.574，p＜.05］ので単純主効果を分析したところ，私的自己意識Ｈ群の水準においては公的自己意識のＨ群がＬ群より0.1％水準で有意に強い対人的緊張を示し，公的自己意識Ｌ群の水準においては私的自己意識のＬ群の方がＨ群よりも１％水準で有意に強い対人的緊張を示した。つまり，人間同士は相互に理解・共感しあえないと思っている者では，私的自己意識が高い場合には公的自己意識の高い者の方が低い者よりも対人的緊張が強く，また公的自己意識が低い場合には，私的自己意識の低い者の方が高い者よりも対人的緊張が強いことを意味する。

２）孤独感尺度に LSO-E を用いた場合

公的自己意識，私的自己意識，LSO-E を要因とした分散分析をおこなった（Table 9 参照）。

Table 9　対人的緊張得点における３要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	4345.739	1	4345.739	42.034＊＊＊
私的自己意識（B）	508.018	1	508.018	4.914＊
LSO-E（C）	342.889	1	342.889	3.317＋
A＊B	394.320	1	394.320	3.814＋
A＊C	398.884	1	398.884	3.858＋
B＊C	1.379	1	1.379	.013
A＊B＊C	8.753	1	8.753	.085
誤差	25329.906	245	103.387	
		＋p＜.1	＊p＜.05	＊＊＊p＜.001

その結果，公的自己意識と私的自己意識の二要因間に交互作用の傾向が見られた［F（1,245）＝3.814，p＜.1］ので単純主効果の検定を行ったところ，私的自己意識Ｈ群の水準においては0.1％水準で，また私的自己意識Ｌ群の水準においては１％水準で，いずれも公的自己意識が

高い者の方が低い者よりも有意に強い対人的緊張を示すという結果が得られた。一方，公的自己意識L群の水準においては，私的自己意識のL群の方がH群よりも1％水準強い対人的緊張を示した。つまり，私的自己意識の高低には関係なく，公的自己意識が高い者の方が低い者よりも対人的緊張が強いということ，また，公的自己意識が高い場合には私的自己意識の高低による差は見られないのに，公的自己意識が低い場合には私的自己意識が低い者の方が高い者よりも対人的緊張が強いということがいえる。

また，公的自己意識とLSO-Eの要因間にも有意な交互作用の傾向が見られた［F（1,245）＝3.858, p＜.1］ので単純主効果検定をおこなったところ，LSO-EのH群，L群両水準で，いずれも公的自己意識のH群とL群の間に1％水準で有意差が見られ，公的自己意識の高い者の方が低い者よりも1％水準で有意に強い対人的緊張を示した。つまり，人間の個別性に気づいているか否かに関係なく，公的自己意識が高い者の方が低い者よりも対人的緊張は強いということである。さらに，公的自己意識のH群の水準においてのみ，LSO-EのH群の方がL群よりも1％の有意水準で対人的緊張が強かったことから，公的自己意識が高い者では，人間の個別性に気づいている者の方が気づいていない者よりも対人的緊張が強く，公的自己意識が低い者では人間の個別性への気づきと対人的緊張の強さには関係がないといえる。

2．評価不安について

1）孤独感尺度にLSO-Uを用いた場合

評価不安について，公的自己意識のH群・L群，私的自己意識のH群・L群，LSO-UのH群・L群ごとに平均および標準偏差を求めた（Table 10参照）。

Table 10　各条件別の評価不安の得点の平均及び標準偏差

	孤独感	公的自己意識H群		公的自己意識L群	
		私的自己意識H群	私的自己意識L群	私的自己意識H群	私的自己意識L群
評価不安	LSO-U H群	36.49 (6.91)	34.41 (5.47)	24.81 (8.50)	25.85 (7.59)
	LSO-U L群	39.00 (7.62)	35.33 (2.52)	17.50 (10.47)	26.58 (10.69)
	LSO-E H群	37.39 (7.04)	35.65 (5.03)	23.21 (9.89)	25.69 (8.12)
	LSO-E L群	36.42 (6.92)	33.00 (5.63)	26.93 (6.70)	26.61 (8.26)

（　）内はSD

Table 10の結果に基づいて三要因の分散分析をおこなった（Table 11参照）。その結果，公的自己意識と私的自己意識の二要因間に5％水準の交互作用がみられた［F（1,262）＝5.685, p

<.05] ので単純主効果の検定をしたところ，私的自己意識のH群とL群のいずれの水準においても，公的自己意識のH群の方がL群よりも0.1%水準で有意に強い評価不安を示したことから，私的自己意識の高低に関係なく，公的自己意識が高い者の方が低い者よりも評価不安が強いといえる。一方，公的自己意識のH群の水準においては，私的自己意識の高い者の方が低い者よりも5%水準で有意に強い評価不安を示したのに対して，公的自己意識のL群の水準では逆に私的自己意識が低い者の方が高い者よりも0.1%水準で強い評価不安を示した。

Table 11　評価不安の得点における3要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	3148.055	1	3148.005	57.562＊＊＊
私的自己意識（B）	23.650	1	23.650	.432
LSO-U（C）	12.136	1	12.136	.222
A＊B	310.888	1	310.888	5.685＊
A＊C	123.799	1	123.799	2.264
B＊C	51.495	1	51.495	.942
A＊B＊C	114.625	1	114.625	2.096
誤差	14328.702	262	54.690	
			＊p< .05	＊＊＊p< .001

2）孤独感尺度にLSO-Eを用いた場合

Table 10に基づいて公的自己意識，私的自己意識，LSO-Eの三要因で分散分析をおこなったところ（Table 12参照），公的自己意識と私的自己意識の二要因間に有意な交互作用の傾向がみられた［F（1, 249）= 3. 299, p <. 1］。そこで，この交互作用について単純主効果の検定をおこなった結果，私的自己意識のH群，L群の両水準とも公的自己意識が高い者の方が低い者よりも0.1%水準で有意に強い評価不安を示した。一方，公的自己意識がH群の水準では私的自己意識が高い者の方が低い者よりも強い評価不安を示す傾向がみられたが，公的自己意識がL群の水準では私的自己意識の高低による評価不安の差はみられなかった。

Table 12　評価不安の得点における3要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	5529.888	1	5529.888	99.135＊＊＊
私的自己意識（B）	31.264	1	31.264	.560
LSO-E（C）	3.598	1	3.598	.065
A＊B	184.037	1	184.037	3.299＋
A＊C	235.229	1	235.229	4.217＊
B＊C	69.646	1	69.646	1.249
A＊B＊C	4.250	1	4.250	.076
誤差	13889.578	249	55.78	
		＋p< .1	＊p< .05	＊＊＊p< .001

また，公的自己意識とLSO-Eの要因間にも5％水準で有意な交互作用がみられた[F(1,249)=4.217, p.05]ので単純主効果の検定をおこなったところ，LSO-EのH群，L群の両水準とも0.1％水準で公的自己意識の高い者の方が低い者よりも有意に強い評価不安を示したことから，人間の個別性に気づいているか否かには関係なく，公的自己意識が高い者のほうが低い者よりも評価不安は強いという結果が得られたことになる。一方，公的自己意識の水準に関しては，L水準においてのみLSO-Eの低い者のほうが高い者よりも評価不安を強く示す傾向にあるという結果が得られた。

3．発話不安について

1）孤独感尺度にLSO-Uを用いた場合

発話不安の得点について公的自己意識のH群・L群，私的自己意識のH群・L群，LSO-UのH群・L群ごとに平均と標準偏差を求めたのがTable 13である。

Table 13　各条件別の評価不安の得点の平均及び標準偏差

	孤独感	公的自己意識H群		公的自己意識L群	
		私的自己意識H群	私的自己意識L群	私的自己意識H群	私的自己意識L群
発話不安	LSO-U H群	9.16 (2.63)	8.61 (2.42)	6.38 (2.53)	6.75 (2.23)
	LSO-U L群	10.71 (3.07)	10.00 (1.00)	5.25 (2.87)	8.00 (3.72)
	LSO-E H群	9.89 (2.60)	9.38 (1.81)	6.50 (2.90)	6.83 (2.69)
	LSO-E L群	8.65 (2.67)	8.00 (2.77)	6.00 (2.04)	6.97 (2.36)

（　）内はSD

Table 13に基づいて三要因の分散分析をおこなったところ（Table 14参照），公的自己意識と私的自己意識の二要因間の交互作用が有意な傾向を示したので［F（1,263）=3,654, p＜.1］この二要因間の交互作用について単純主効果検定をおこなった。その結果，私的自己意識のH群・L群の両水準において，公的自己意識のH群の方がL群よりもいずれも0.1％水準で有意に強い発話不安を持っていることが示された。

Table 14　発話不安の得点における3要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	180.988	1	180.988	27.824＊＊＊
私的自己意識（B）	4.266	1	4.266	.656
LSO-U（C）	11.533	1	11.533	1.773
A＊B	23.771	1	23.771	3.654＋
A＊B	9.853	1	9.853	1.515
B＊C	6.051	1	6.051	.930
A＊B＊C	7.982	1	7.982	1.227
誤差	1710.760	263	6.505	

＋p＜.1　　＊＊＊p＜.001

また，公的自己意識のH群の水準では，私的自己意識のH群とL群との間に発話不安の差は見られなかったが，L群の水準では私的自己意識の低い者の方が高い者よりも1％水準で強い発話不安を示した。

2）孤独感尺度にLSO-Eを用いた場合

Table 13に基づいて三要因の分散分析をおこなったところ（Table 15参照），公的自己意識と私的自己意識の二要因間の交互作用に有意傾向がみられ［F（1, 249）＝3.233, p＜.1］，LSO-Eの主効果が有意であった［F（1, 249）＝4.747, p＜.05］。

Table 15　発話不安の得点における３要因分散分析表

要因	平方和 SS	自由度 df	平均平方 MS（SS／df）	F
公的自己意識（A）	320.179	1	320.179	49.272＊＊＊
私的自己意識（B）	.067	1	.067	.010
LSO-E（C）	30.847	1	30.847	4.747＊
A＊B	21.012	1	21.012	3.233＋
A＊C	17.663	1	17.663	2.718
B＊C	.838	1	.838	.129
A＊B＊C	2.101	1	2.101	.323
誤差	1618.043	249.000	6.498	
		＋p＜.1	＊p＜.05	＊＊＊p＜.001

そこで，二要因間の交互作用について単純主効果を分析したところ，私的自己意識のH群・L群の両水準とも，公的自己意識のH群の方がL群よりも0.1％水準で有意に強い発話不安が示され，またLSO-E要因に関しては，H群の方がL群よりも，つまり人間の個別性に気づいている者の方が気づいていない者よりも発話不安が強いという結果であった。

【考察】

1．対人的緊張について

三要因間の交互作用が有意な傾向を示したために結果が複雑になったが，最も明確にいえることは他の条件がどうであれ，公的自己意識が高い場合には対人的緊張が強いということである。例えばFig. 1は私的自己意識が高い群についての分析結果を示したものであるが，LSO-UがH群・L群を問わず，つまり“人間同士は相互理解が可能である”と考えるか否かに関係なく，公的自己意識が高い者は低い者よりも一貫して強い対人的緊張を示しているのである。これは私的自己意識が低い群についても同じである。またFig. 1についていえば，公

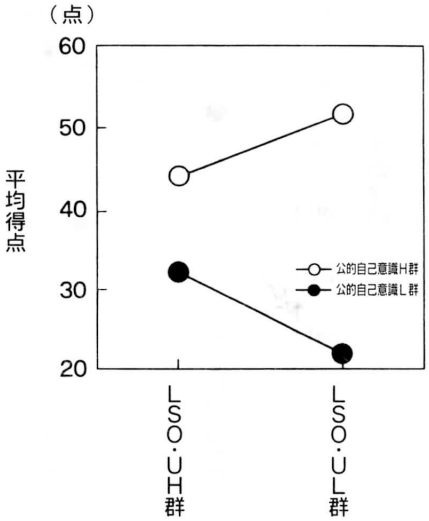

Fig.1　対人的緊張の平均得点

的自己意識が高い群においては，人間同士は理解・共感できないと思っている群の方ができると思っている群よりも対人的緊張が有意に強いということであるが，これを逆にいえば，公的自己意識が低い群は他人に見える外的な自分に関心が低いために，人間同士は理解・共感できないと思うことによって他人がどう思おうと気にならないため，対人的緊張が低くなったともいえる。

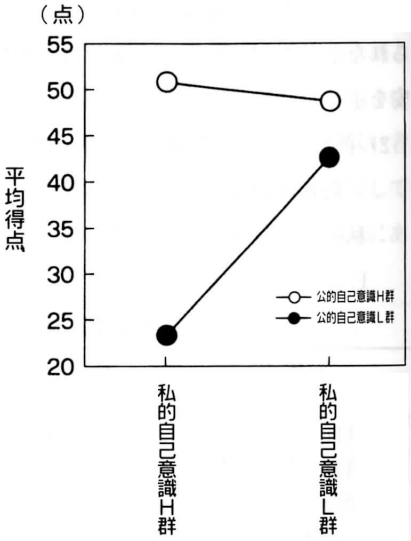

Fig.2　対人的緊張の平均得点

Fig. 2は，LSO-UのH群について分析した結果を図示したものであるが，ここでも，私的自己意識の高低とは関係なく，公的自己意識が高い者の方が低い者よりも一貫して強い対人的緊張を示している。これはLSO-UのL群でも同様である。Fig. 2で興味深いことは，公的自己意識が高ければ無条件で対人的緊張も高いのであるが，公的自己意識が低い場合には私的自己意識が高いと対人的緊張が緩和され，低い場合に強い緊張が引き起こされていることである。このことは“私的自己意識が高い人はその時々での自分の意見，態度を自覚しているため，態度と行動の間の一貫性が高く，他者の内面への関心が高い”，“私的自己意識が高いと個人的アイデンティティを重視する”，“私的自己意識は自己の視点に対する意識を高め内的価値観に従わせる”といった従来から指摘されている結果とも符合する様に思われる。

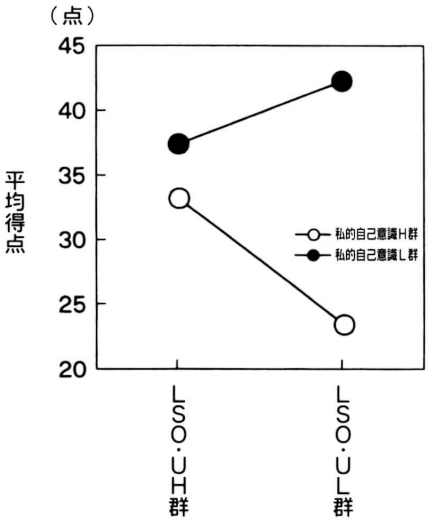

Fig.3　対人的緊張の平均得点

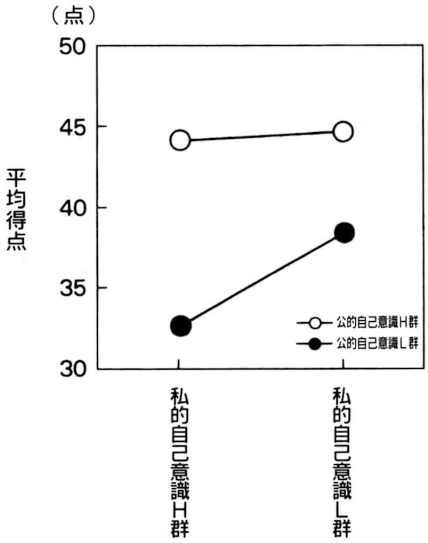

Fig.4　対人的緊張の平均得点

これと同じ様な結果はFig. 3においても指摘できる。Fig. 3は公的自己意識の低い群についての分析結果を示したものであるが，人間同士の相互理解を信じるか否かに関係なく，一貫して私的自己意識の高い者の方が対人的緊張は低いのである。これは，私的自己意識の高い者は自己の信念や態度に対する自覚や一貫性が高く他者に左右され難いということを意味しているのではないだろうか。さらに同様のことが，次のFig. 4でもいえる。Fig. 4はLSO-Eを孤独感の尺度に用いた場合の分析結果を示したものであるが，ここでも，公的自己意識が高い者は低い者よりも一貫して対人的緊張は高いが，その高さは私的自己意識が高い場合には抑制され，私的自己意識が低い場合に顕在化している。

2．評価不安について

評価不安に関する分析結果は，対人的緊張に関して得られたものと大体において同じである。評価不安に関しては，孤独感は両尺度ともあまり関係しておらず，自己意識の内容との関わりが中心であった。Fig. 5をみると，私的自己意識の高低とは関係なく，公的自己意識が高い場合に一貫して高い評価不安を示していることがわかる。公的自己意識が高い群について考察すると，公的自己意識が高いことから生じたネガティブな評価への恐れが，私的自己意識が高い事によってそこへ焦点化されたため，私的自己意識が高い群で評価不安が高くなったと解釈できるだろう。一方，公的自己意識の影響が低いL群についてみてみると，私的自己意識が高い場合には自己の内面への焦点化が優先されたことから評価不安は低くなり，私的自己意識が低い場合に内的自己が希薄化するために評価不安となって現れたのではないだろうか。

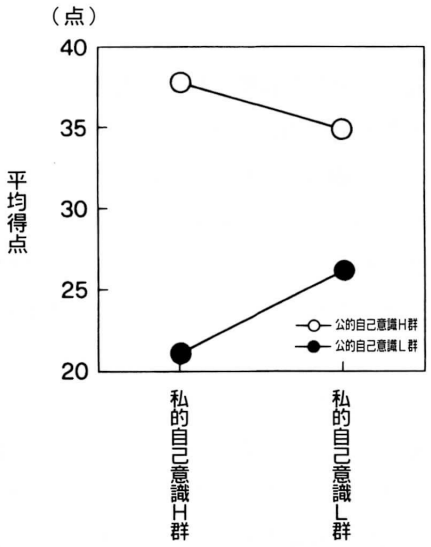

Fig.5　評価不安の平均得点

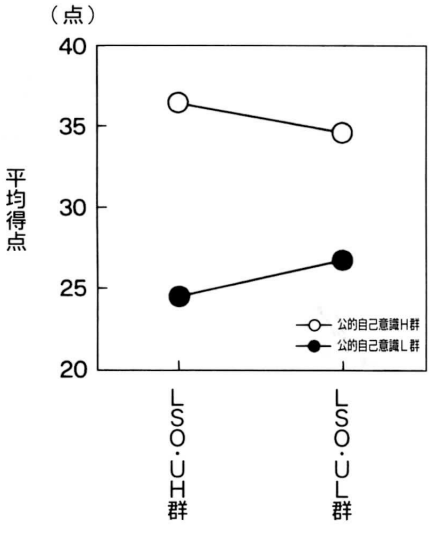

Fig.6　評価不安の平均得点

Fig. 6は，個別性への気づきと公的自己意識の要因が評価不安に及ぼす影響を分析したものであるが，個別性への気づきという意味での孤独感の強さとは関係なく，公的自己意識の高い者が低い者よりも他者からの評価を強く意識し，不安を感じているといえる。ところが，公的自己意識が低い者にあっては，他者から見られる自分への関心が低いために一般に評価不安は低いが，人間の個別性に気づいている者は，人との距離を自覚していることから，個別性に気づいていない者よりもさらに評価不安が低くなったと考えられるのではないだろうか。

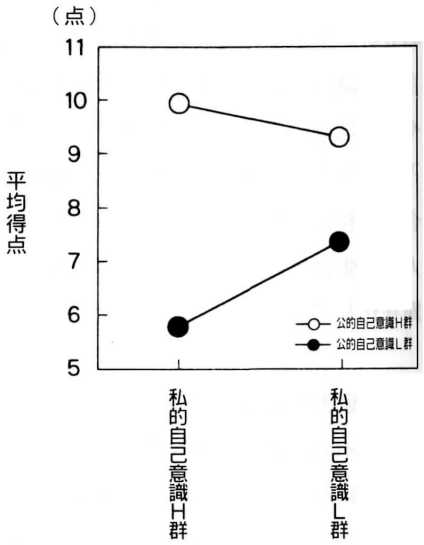

Fig.7　発話不安の平均得点

3．発話不安について

ここでもやはり似たような結果が得られた。Fig. 7は自己意識の在り方と発話不安との関係を示したものであるが，私的自己意識の高低に関係なく公的自己意識の高い者が低い者よりも発話不安が強く，また，公的自己意識が低い場合に限っていえば，私的自己意識の高い者の方が低い者よりも発話不安は有意に低いという結果である。公的自己意識が低い者にあっては，自分の言動によって他者が自分にどのような印象を持つかということにあまり拘らない一方で，自分自身の内面については正確な情報を持ち，しかも自己の言動の一貫性の方にこだわりを示すための結果であると思われる。

【総合的考察】

まず，公的自己意識と対人不安との関連については，従来の研究で指摘されていた通りの結果が得られた。つまり，公的自己意識が高い者は低い者よりも対人的緊張，評価不安，発話不安のいずれも強いことが示された。公的自己意識の高い者は，他者から観察可能な自己の容姿や行動に注意や関心を向けることで自己を社会的対象として，また，他者からの注意の対象として意識しやすいことから，対人的な場面での緊張や不安が高まるものと思われる。これに高い私的自己意識まで加わると，そのような自分の内面への焦点化が一層促進されることによって，さらに強い対人不安となって現れるものと思われる。

公的自己意識が低い者にあっては，私的自己意識の特性である個人的・内的アイデンティティを重視する傾向が現れやすくなるようである。そのため，私的自己意識が高い場合には一貫して対人不安は低くなるという結果が得られた。他者からどう見られるかということよりも，自己の価値観や内的一貫性のほうが関心の対象になるためであろう。公的自己意識も私的自己意識もともに低い場合には，内的な自己への自覚の低さ，あるいは内面に自分というものを持ち合わせていない心許

なさが作用したのであろうか，他者からの評価には関心が薄いはずなのに対人不安は強くなるという結果が一貫して得られた。

参考・引用文献

Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A. H., 1975 Public and private self consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43, 522-527.

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究（Ⅰ）－孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討　実験心理学研究　Vol. 22, No. 2, 99-108.

A. Paplau & D. Perlman　加藤義明監訳（1988）　孤独感の心理学　誠信書房

Leary, A. R. 1983 Understunding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives. CSAGE Publications, INC.（リアリー著　生和秀敏　監訳　1990　対人不安　北大路書房）

松尾直博・新井邦二郎　1988　児童の対人不安傾向と公的自己意識，対人的自己効力感との関係　教育心理学研究　Vol. 46, No. 1　21-30.

諸井克英　1985　高校生における孤独感と自己意識　心理学研究　Vol. 56, No. 4, 141-151.

諸井克英　1989　大学生における孤独感と対処方略　実験心理学研究　Vol. 29, No. 2, 141-151.

落合良行　1974　現代青年における孤独感の構造（Ⅰ）　教育心理学研究　Vol. 22, No. 3, 162-170.

落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究　Vol. 30, No. 3, 233-238.

落合良行　1983　孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成　教育心理学研究　Vol. 31, No. 1, 332-336.

落合良行　1985　青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造　教育心理学研究　Vol. 33, No. 1, 70-75.

菅原健介　1984　自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み　心理学研究　Vol. 55, No. 3, 184-188.

菅原健介　1988　対人不安研究における公的自己意識の意義について　東京都立大学人文学報，Vol. 196, 103-116.

菅原健介　1992　対人不安の類型に関する研究　社会心理学研究　Vol. 7, 19-28.

菅原健介　1996　対人不安と社会的スキル　相川充・津村俊充編　対人行動学研究シリーズ；社会的スキルと対人関係－自己表現を援助する　誠心書房

辻平治郎　1984　自己意識と対人不安　日本心理学会第48回大会発表論文集　636.

辻平治郎　1987　自己意識と他者意識　日本教育心理学会第29回総会発表論文集　514-515.

辻平治郎　1993　自己意識と他者意識　北大路書房